

宮地建夫先生の略歴と抄録

東京歯科大学臨床教授 宮地建夫 (みやぢ たてお)

1967年 東京歯科大学卒業
1971年 同大学院修了 (解剖学専攻)
1972年 東京都千代田区開業
1975年 岩手医科大学歯学部非常勤講師
2009年 東京歯科大学臨床教授
2011年 日本補綴歯科学会理事
2012年 大阪大学歯学部非常勤講師
現在 歯科診療室新宿 NS 勤務

テーマ 「経過から学んだ欠損歯列の私の見方」

欠損歯列はどう補綴するかという当座の指針も大切ですが、その患者がどこにどのようなリスクを抱えていて、これからどのように推移するだろうかという「将来の読み」が臨床では必要になります。それは欠損歯列が“一つの連続した病態”だからで、将来を予測しそれに備えることができれば、長い目で見て患者さんからそれなりの評価を受けるはずだと思っています。

とはいえ、将来予測はそう簡単ではありませんし、大方は外れるものだという覚悟も必要です。といっても将来予測をあきらめるわけにはいきません。欠損歯列の将来予測のポイントは一人一人に固有のコースを見つけることではないかと思うようになりました。歯科疾患のコースは長い年月でゆっくりと推移しますから、その流れを把握するためには経過の記録と同時にコースを捉える指標が必要になります。私はレベル・パターン・スピードという3つの視点で欠損歯列のコースを診ていくようにしています。今回症例の長期経過に添ってコースの見方を提示したいと思います。経過ですから後ろ向きで振り返り報告に終始しますが、特に若い先生方は、それを前向きで未来予測に役立つように翻訳して臨床に活かしていただければと思っています。

奥森健史先生特別講演

欠損補綴の“次の一手”を考える

～失われた機能を回復する可撤性装置のデザインと補綴後のリスクを再考する～



有限会社デンタル・プログレッシブ
代表取締役

おくもりたけし

奥森健史 先生

1984年 東洋医療専門学校卒業
1992年 渡独 プフォルツハイム
2000年 有限会社デンタル・プログレッシブ開設

現在・・・ 咬合・補綴治療計画セミナー
インストラクター

K. S. I. 研修企画・奥森セミナー主宰
大阪大学歯学部付属病院

歯科技工スーパーバイザー

日本歯科技工士会 認定講師

大阪SJCD会員

古希の会会員

デントラム社公認インストラクター

一時代を通過してきたインプラントによる術式も、その予後ケースから多くを考察することも重要である。中には、緩圧・非緩圧をうまくコントロールし目には見えない“力”をコントロールしながら長期予後に達しているケースも少なくない。

いずれにせよ私たちラボサイドとしても欠損部分に失われた“歯と歯周組織”を回復し、審美・機能の改善を図ると同時に顎口腔系の全てが機能していく治療ゴールを理想とする。例えば、インプラント補綴と残存歯にて美しく再構成された上下顎歯列においても、予後的にさまざまな悪い条件が重なり“再介入”となった場合もある。そして固定性装置から可撤性装置へと移行する対応も今後の“次の一手”としての引き出しではないであろうか。

欠損補綴のキーワードはラボワークにおいても“機能”と構造力学“となるであろう。本講演では、残存歯、顎堤粘膜、インプラントとそれぞれ異なった“力”をどう補綴装置に組み込むかと言う部分も含め、欠損補綴の基礎となるパーシャルデンチャーにおける力のコントロールを指標とし、インプラントがアシストするオーバーデンチャーまでの臨床例を考察したい。また補綴治療終了後にその予後のリスクも予測し再介入時の“次の一手”を考えておくことも必要ではないでしょうか。そこで、欠損歯列における“支台装置への力学的考察”と“咀嚼ユニットの動きをコントロール”部分をターゲットに絞って考察したい。口腔模倣において、歯を還元させるプロセスには、“色”“形態”という目に見える部分と、それらが歯列として、一体化しそこへ加わる機能的考察すなわち“目には見えない力”という部分をどうコントロールするのか、ラボサイドにおいても押さえておくことが最重要ではないでしょうか。